

20世紀初頭における アイルランド・ミーズ州の世帯構造

清水 由文

キーワード：アイルランド，ミーズ州，直系家族，拡大家族世帯，
多核家族世帯

はじめに

前稿において1930年代にアレンスバークとキンボールが調査したクレア州の世帯構造を1901年と1911年における州全体のセンサス個票をデータにして分析した結果、アレンスバークの『アイルランドのカントリーマン』およびキンボールとの共著である『アイルランドにおける家族とコミュニティ』で提起された直系家族の基本的枠組で直系家族の存在を検証することができた〔清水，2011〕。すなわち、クレア州では拡大家族世帯と多核家族世帯が20%以上で、農民世帯の場合には26%を占め、その大部分が直系家族であった。これまでクレア州を含む西部アイルランドで、直系家族の存在がいくつかの研究で確認されている。しかし東部アイルランドにおける家族研究は松尾の研究〔松尾，1995〕以外ほとんど存在しない¹⁾。

1) ウイルソンによる人類学的フィールドの分布をみれば、西部アイルランドにおける研究が多く認められるが、東部アイルランドでの調査は少なく、ウイルソンによるミーズの研究のみである。

本稿では先進地農村地域であるミーズ州における1901年と1911年の全センサス個票をデータとして、東部アイルランドにおける世帯構造を明らかにすることが目的である。

1. ミーズ州における世帯構造の分析仮説

アイルランドの世帯構造を分析する場合、ここでは独立変数として世帯主職業（農業、非農業）、従属変数として世帯構造、さらに媒介変数として土地保有、結婚、相続、労働市場をそれぞれ変数とみなしておこう。

これまで筆者は1821～1911年のセンサス個票をデータにした分析結果から、19世紀初頭にはアイルランドの家族は未開墾地拡大の可能性、ポテト耕作の容易性、分割相続（partible inheritance）と早婚、高婚姻率にもとづく核家族が支配的形態であったと考える [Clarkson, 1981, 237, Y.Shimizu, 2008, 清水 2011]。しかし、その後、相続システムの変化が家族変化に大きな変化を与えた。相続変化の時期に関してもまだ明確な定説はないが、おそらく1852年の土地改革法（Land Law Act）の実施に伴う分割相続の禁止により [C. M.Arensberg and S.T.Kimball, 2001, 237], 不分割相続（impartible inheritance）になったとみてよい。つまり土地相続システムの変化に、フィッツパトリックの1852年説 [Fitzpatrick, D, 1982], ブリーンの大飢饉以降説 [Breen, Richard, 1980] が提起されているが、その変化はほぼ大飢饉以降であると想定してよいだろう。その背景には地主による土地分割の抵抗、19世紀中頃からの地主の囲い込みによる小作人追放、耕作地の枯渇などがあげられる [Clarkson, 1981, 237]。

それに対して持参金（dowry）と縁組婚（matchmaking）システムは大飢饉以前にすでに家族規範として存在していたとみられている [米村, 1981, 141]。

つまり直系家族はそのような不分割相続という相続システムと持参金と結

2) 家族状況の要因には、家族構成、家族員の属性、土地保有、家屋敷地などが含まれる。

びつく縁組婚システムの統合により形成され、それが家族状況的要因²⁾により

Map 1. Map of Ireland, showing major towns and political divisions



Source: Thomas, Bartlett, Ireland, A History, 2010, Map 1.

支持されたといえる。

そのような直系家族規範形成後、家長は土地や農業労働に対する統制権を強くもち、それらの統制権を維持し続け、家名を土地に残したいという強い意識も生じ [L.Kennedy, 1991, 478], それがアイルランドの家族における父系性の顕在化を示すことになる [Rita M, Rhodes, 1992, 88] そして現実に家長が家長権を保持し続け、後継者の指名、指名した後継者への家督、家産の権限移譲を延期させる傾向にあった。

その結果、息子たちの相続や結婚は親の体力の衰えや死亡まで待つことを強いられ、晩婚化あるいは未婚化の特徴が顕現してきた。また1881年頃よりアイルランドで浸透していった生涯独身者 (celibacy) や晩婚化の増加が、婚姻率の低下を促進させた。そのような性格が1908年の年金制度の改正 (Pension Law) まで強く内包されていた。そして後継者に指名されなかった息子たちは少しの金銭を得て、Dublin, Belfast, Corkなどの都市での就労、イギリスやアメリカへの移民、あるいは家に残留という選択をしなければならなかった。つまり19世紀末から20世紀初頭にアイルランドで直系家族の規範が一番強くみとめられた時期であった。そのような家長と後継者との駆け引きには相互に利益があったとみなせよう。

アレンスバークとキンボールが、そのようなCo.Clareの中小規模農村で直系家族規範をもつ家族構造を西部アイルランドで提起したが、その結論は妥当といえる。しかし他方では東部アイルランドで家族を形成しない頻度が高いことも明らかにされている [松尾, 51]。それは土地なし労働者と大土地保有農民の分化と関連する。農民の場合には家長が死亡するまで土地保有権を含む家長権を長く保持し続け、後継予定者の相続、結婚待ち、早い息子たちの離家、あるいは世帯主の独身による無後継者が家族状況として存在した。他方土地なし労働者の世帯では、子供は早く離家し、家族形成の準備状況により早く世帯形成が可能であり、その準備が不可能であれば一人世帯を形成する可能性を強くもつことになった。

アイルランドの人口移動は国内移動 (Internal migration), 国際移動 (International migration), 大西洋移動 (Atlantic migration) に3区分できるだろう [Steidl, Annemarie 2007, 1-2, Steidl, Annemarie, 2009, 7-9]。そうすれば国内移動に関してCo.Meathは首都ダブリンに隣接した労働市場をプル要因として、土地なし労働者やその子供たちはDublinで就業し、国際移動としてイギリス、大西洋移動としてアメリカへの移民がダブリン港から容易であった。したがってミーズ州での労働者世帯の移動性の高さは、後述するように1901~11年の10年間における継続世帯の少なさ、とくに労働者世帯の消滅世帯、新しい労働者世帯の入村が多くみられたことにより判断できる。

しかし農民の場合にCo.Meathで後継者が相続し、すぐに結婚する場合と、未婚で残留の兄弟と農業経営を維持する戦略が採用される可能性をもっている。しかも100エーカー以上層では家族労働力のみでは経営が不可能であり、当然農業労働者の雇用、サーヴァントが必要になり、残留の未婚の兄弟も労働力として重要であった。

それゆえ、ミーズ州の世帯構造は、晩婚、単身者がクレア州よりも多い傾向にある。さらにミーズ州の世帯は国内移動、国際移動、大西洋移動が、クレア州の世帯より容易である理由も存在する。それはさらに人口構造にも反映され、人口流動性の高い結果を導いた。

以上のようにミーズ州の世帯は西部アイルランドにおける直系家族規範を基本的に農民世帯でもつものの、労働者世帯では弱く、直系家族規範を支持する家族状況要因の多様化により世帯形成の多様化が発現し、拡大家族世帯、多核家族世帯が西部アイルランドより形成されにくいという仮説を提起することができよう。

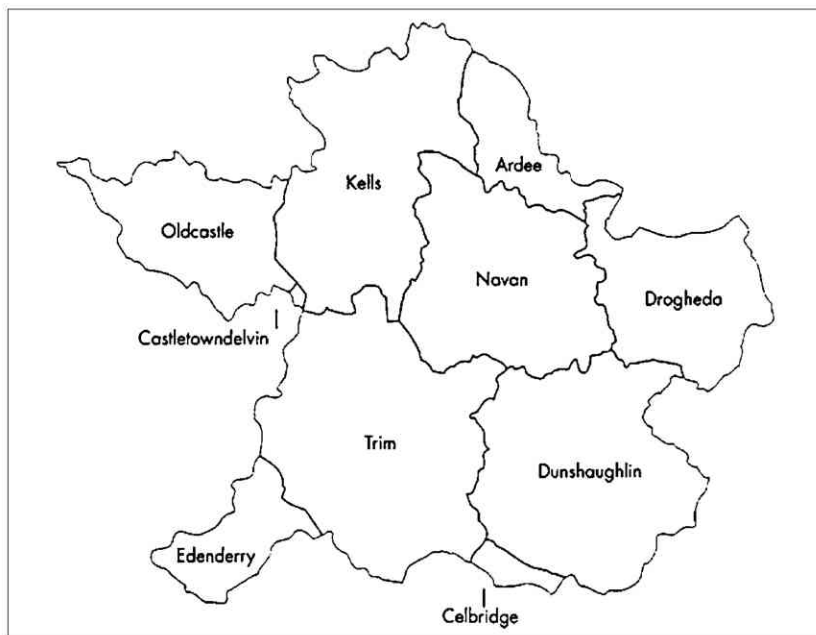
2. ミーズ州の概況

(1) データの属性

ミーズ州はレンスター地方に属する州であり、ラウズ州、モナハン州、キ

ヤヴァン州、ウエスト・ミーズ州、南にキング州（現在のオファーリー州）、キルデア州、ダブリンに取り囲まれている。ミーズ州は首都ダブリンから北西 40 km に位置し、近くに先史時代の遺跡ニューグレンジ、古代上王の宮廷があったタラ、ノルマンが城を築いたトリムがある。また 15 世紀にイギリス王が統治の橋頭堡された特別行政地域（Pale）に含まれているという歴史的特徴を持つ地域なのであった〔松尾，1991，37〕。そして、地理学的には、ミーズ州が位置する地域は、「東部三角地帯」と呼ばれ、比較的雨量が少なく、山地や沼沢地によって切断されることがない、相対的に肥沃な土壌をもつ好条件に恵まれた地域であった〔松尾：1998，241-242〕

Map 2. Poor Law Unions in Co.Meath



Source: Peter Connell, *The Land and People of County Meath, 1750-1850*, 2004, 159.

ミーズ州はセンサスの調査単位として、Ardee, Drogheda, Dunshanghlin, Edenderry, Kells, Navan, Oldcastle, Trimの8つの救貧区 (Poor Law Union) に区分される。またそれぞれの救貧区が選挙区 (District Electoral Division), タウンランド (Townland) に再区分されるが、タウンランドがセンサスの最小調査単位であった。そして使用するデータに関して、1901年で92選挙区, 1,365タウンランド, 15,474世帯, 67,839人, 1911年で, 91選挙区, 1,373タウンランド, 14,780世帯, 63,479人のデータである。1911年の選挙区単位での人口をみておくと、Navan Urbanが3,549人で一番多く、以下Kells Urban (2,320人), Navan Rural (2,099人) という順序である。

センサス個票から得られるデータとして、1901年センサスで姓, 名前, 年齢, 性, 宗教, 教育 (読み書き), 職業, 出生地, 英語能力の変数が、1911年で、それらの変数に結婚年数, 子供の出生数, 現在生存する子供数の変数が追加され、それらの基本変数から構築変数 (世帯規模, 子供数, 世帯類型など) を作成することができるとともに、全変数間のクロス集計が可能である。

(2) ミーズ州の農業

アイルランドの経済, 社会構造は、デリーとコーク線を境界に西部アイルランドと東部アイルランドでは大きく相違する。調査対象地であるミーズ州は農業に関して大飢饉まで主に穀作農業がおこなわれていたが、特に大飢饉以降牧畜業が進展したのであった。ミーズ州では家畜のダブリンでの売却や、イギリスへの生牛での輸出が盛んになったことにより、ミーズ州は商業的農業が大規模農場に展開されてきた先進地型牧畜農村地域であった。

まず農地保有に関して表1をみれば、1901年のミーズ州全体では、30エーカー以下層が70%, 50~100エーカーが9.2%, 100~200エーカーが6.9%, 200~500エーカーが4.2%, 500エーカー以上層が0.7%を占めるが、アイルランド全体と比較すれば、100エーカー層以上では多い。しかしミーズ州全体でいえば1901年で1エーカー未満層が23.4%, 1911年で27.3%をしめ、その

Table 1.
Percentage of Landholdings in Co. Meath by Poor Law Union (%)

	~5	5~15	15~30	30~50	50~100	100~200	200~500	500~	N
1.Ardee	36.3	18.3	17.2	10.8	9.0	5.8	2.6	0.3	2,667
2.Drogheda	44.6	17.7	13.7	8.2	8.5	4.7	2.7	0.2	3,373
3.Dunshaughlin	27.3	15.9	10.6	8.5	13.5	14.6	8.4	1.1	1,509
4.Edenderry	36.8	18.5	12.8	9.1	9.7	7.4	4.9	0.9	2,882
5.Kells	34.0	21.1	17.0	9.8	8.4	5.2	3.6	0.7	2,634
6.Navan	39.7	19.9	13.5	8.8	7.2	6.7	3.4	0.8	2,369
7.Oldcastle	22.0	28.6	26.1	11.4	7.4	2.6	1.5	0.4	2,786
8.Trim	45.3	18.8	12.4	6.7	7.5	4.8	3.8	0.6	3,206
Co. Meath	36.8	18.8	14.4	9.1	9.2	6.9	4.2	0.7	13,269
Co. Clare	20.8	17.9	18.2	18.2	14.1	4.8	1.8	0.3	22,754
Ireland	49.2	22.8	22.8	12.6	9.8	3.7	1.7	0.3	586,717

(Note) Unit=Statute Acres

Source: Agricultural Statistics of Ireland, 1901

Table 2.
The Extent of Land under Crops by Poor Law Union in Co.Meath (1901, %)

	Crops	Glass	Fallow	Woods & Plantation	Tarf & Bog	Marsh	Barren Mountain land	Water,Roads Fences
1.Ardee	33.3	57.3	0.1	2.5	0.9	0.6	0.0	5.1
2.Drogheda	26.2	68.7	0.4	1.6	0.1	0.1	0.6	5.3
3.Dunshaughlin	13.4	81.6	0.0	1.1	0.0	0.1	0.0	3.8
4.Edenderry	17.8	53.4	0.0	1.0	22.9	1.3	0.0	3.6
5.Kells	21.7	69.4	0.1	1.8	1.8	0.6	0.1	4.5
6.Navan	19.3	72.4	0.2	2.3	0.3	1.2	0.0	5.3
7.Oldcastle	25.9	64.1	0.0	2.0	2.4	0.8	0.2	4.6
8.Trim	21.4	68.6	0.0	2.1	3.6	0.1	0.0	4.2
Co. Meath	19.5	72.3	0.1	1.7	1.8	0.3	0.1	4.4
Co.Clare	18.3	60.9	0.0	1.1	3.4	1.1	10.3	4.9

Source: Agricultural Statistics of Ireland, 1901

数値は他の州ではみられない顕著な特徴であり、それらが30エーカー層の多さとなっている。したがってクレア州（1エーカー層の8.5%と9.3%）と大きく違う点は、それらの30エーカー層の小規模農民と100エーカー以上の大保有規模農民に分化した特徴をもつことである。なお、1エーカー未満層が一番多い救貧区は、Droghedaで33.6%、Trimで29.6%、Ardeeで28.2%を占め、それらは3分の1近くにのぼる。そして土地保有面積で一番バランスが取れている救貧区はDunshanghlinである。

つぎにミーズ州の収穫可能な土地面積を表2でみれば、クレア州が荒野、山地が10%であり、それと比較すれば、ミーズ州の土地利用は一見して平地が多い穀物耕作地に適していることがわかる。

そしてミーズ州の穀物生産を表3でみれば、燕麦が16.3%、ジャガイモの7.8%、干し草の65.5%が中核的作物であるのに対して、クレア州では干し草が70.1%が一番多く、以下ジャガイモの12.9%、燕麦の7.8%という順序であるが、依然ジャガイモの依存度が高く、それがミーズ州との穀物生産の相違として認められる。またミーズ州の救貧区別にみれば、北東部のArdeeとDroghedaは燕麦、大麦、ターニップが多く、干し草が少ないパターン、北西部のOldcastleは燕麦、ジャガイモが多く、干し草が少ないパターンを示すが、これらの地域はどちらかといえば穀物栽培を中心にした地域とみられる。他方、DunshaughlinとNavanは燕麦、ジャガイモ栽培もみられるが、干し草の割合が高く（79.2%と74.1%）、牧畜中心の農業地域であり、それは、つぎの牛の頭数の多さにも反映されている。したがって、ミーズ州の内部に立ち入って農業を見れば、穀物栽培パターンと牧畜への特化パターンという地域的相違がそこに顕著に認められる。

Table 3.
The Produce of Crops by Poor Law Union in Co.Meath (%)

	Wheat	Oats	Barley	Rye	Potato	Turnips	Cabbage	Hay	Total area
1.Ardee	0.7	22.9	13.9	0.0	6.3	10.0	0.1	39.2	34,679
2.Drogheda	1.0	19.9	10.9	0.0	7.4	9.7	0.2	49.2	25,920
3.Dunshaughlin	0.6	10.0	0.0	0.0	5.4	2.8	0.2	79.2	14,279
4.Edenderry	0.3	15.7	3.5	3.5	8.1	5.6	0.5	62.9	30,752
5.Kells	0.3	21.1	0.1	0.1	11.9	3.6	0.4	61.1	22,438
6.Navan	1.0	12.1	0.0	0.0	6.6	3.6	0.2	74.1	18,264
7.Oldcastle	0.2	23.4	0.0	0.0	14.2	3.7	1.0	54.6	22,217
8.Trim	0.8	16.3	0.1	0.1	6.9	5.1	0.3	67.7	25,510
Co. Meath	0.7	16.3	0.5	0.1	7.8	4.5	0.4	65.5	171,840
Co.Clare	0.9	7.8	0.4	0.7	12.9	3.1	1.2	70.1	143,457

Note: Unit: Staute acre

Source: Agricultural Statistics of Ireland, 1901

Table 4.
Number of Stockholder and Quantity of Live Stock by Poor Law Union in Co.Meath (1901)

	Milk Cow	Cattle			Total	Total	Total	Total	Stockholder
		~2	1~2	~1	Cattle	Sheep	Pigs	Poultry	
1.Ardee	1.2	5.6	2.2	1.0	10.0	8.6	1.3	39.6	2,718
2.Drogheda	1.3	5.5	1.8	1.0	9.6	11.3	0.7	29.8	3,558
3.Dunshaughlin	1.3	24.7	3.4	1.6	31.0	26.9	0.4	25.5	1,544
4.Edenderry	1.6	6.4	2.7	1.5	12.2	12.8	1.5	26.9	2,889
5.Kells	1.2	7.9	2.5	1.0	12.8	12.1	1.3	31.1	2,692
6.Navan	1.1	11.8	2.7	0.9	16.7	17.3	0.5	32.4	2,370
7.Oldcastle	1.5	3.2	2.3	1.4	8.4	8.1	1.1	40.0	2,811
8.Trim	1.1	7.4	2.8	1.2	12.5	3.7	0.4	26.2	3,207
Co. Meath	1.2	10.7	2.3	0.8	15.8	16.6	0.9	30.2	13,381
Co.Clare	3.0	1.6	2.5	2.4	9.5	8.9	2.2	23.4	19,528

Source: Agricultural Statistics of Ireland, 1901

つぎに家畜頭数を保有者単位で示した表4により牧畜化の特徴を明らかにしよう。

まずミーズ州とクレア州の全体を比較すれば、ミーズ州で牛の所有者当たりの総数が15.8頭に対してクレア州では9.5頭、反対に乳牛ではクレア州が3.0頭とミーズ州の1.2頭より多い。またミーズ州で2歳以上の頭数が10.7頭に対して、クレア州では1.6頭であり、そこに大きな違いがみられる。そしてクレア州で1歳以下の頭数が2.4頭とミーズ州の0.8頭より多い。これらの数値からクレア州では購入した子牛を2歳ぐらいまで肥育する。しかし、それ以降、ミーズ州などの東部牧畜業者が肥育用の育成牛を購入し、東部で2.5～3歳まで肥育するという肉用牛における地域的分化が浸透していた。そして、それ以降の年齢の牛は、ダブリン市場での売却やグレート・ブリテンへの生育牛で輸出されるという構図が浮かび上がってくる。

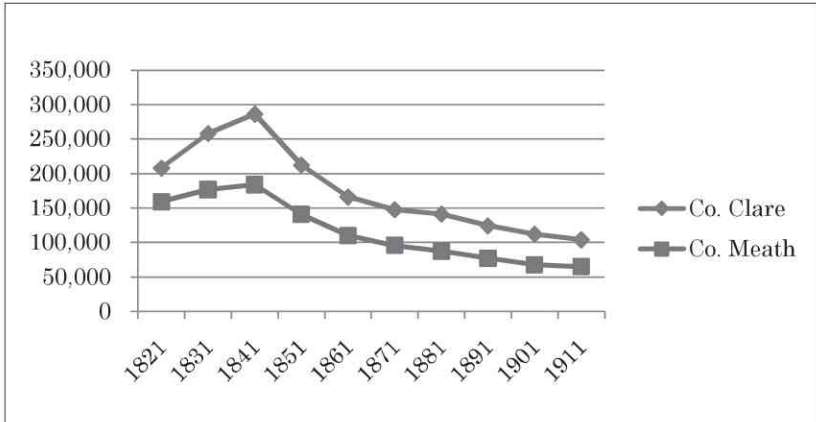
そして救貧区で比較すれば、前述の土地保有でみたようにDunshauglinで牛の保有頭数がトップで平均31頭を保有し、しかも2歳以上が25頭であり、羊も頭数でトップで、一番農業経営でバランスが取れている救貧区であり、つぎにNavanが同じ条件をもっていた。他方、Oldcastleが、一番低く総数が8.4頭であり、2歳以上の頭数でも低くなっている(3.2頭)。したがって、DunshauglinとNavanは牧畜で裕福な地域であるが、Oldcastleはジャガイモに依然依存している貧困地域であり、それ以外の救貧区はそれらの中間地域であると判断されよう。

以上のようにとくにミーズ州は1881年以降耕作農業から牧畜業に大きく変身した先進地商業化農村地域であるが、内部にたちいってみれば、裕福な地域と貧困な地域が混在していることも明らかになった。

そのような先進地で商業的牧畜地域における世帯構造を以下で明らかにしたい。

3. ミーズ州の人口構造

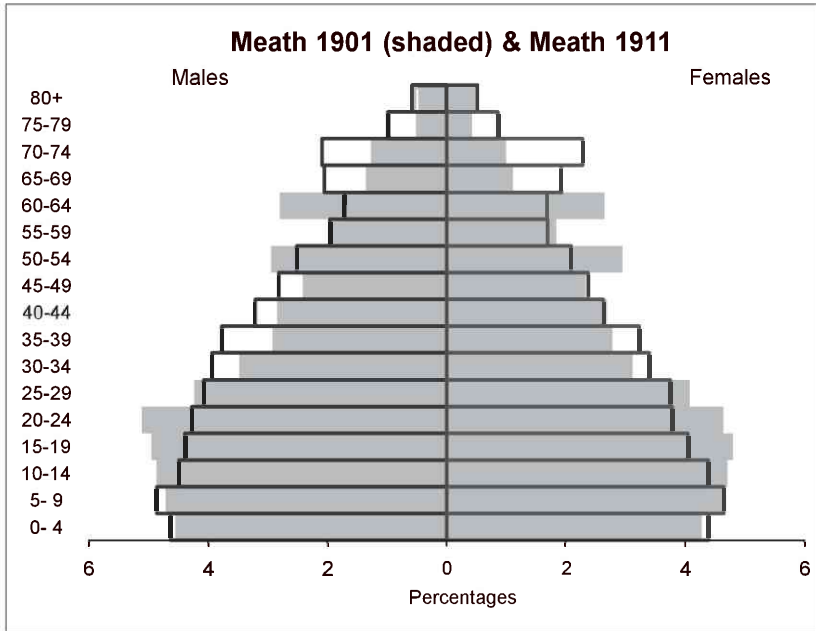
Figure 1. Population Change in Co.Clare and Co.Meath



Source: W.E.Vaughan and A.J.Fitzpatrick, Irish Historical Statistics, 1978.

ミーズ州における人口に関して、19世紀には1841年が18万人でピークであったが、1845年の大飢饉以降減少し、1841～51年に24%、1851～61年に22%減少し続け、それ以降も人口の減少が継続していたのであった。それには隣接した首都ダブリンの労働市場、ダブリン港からのイギリス、アメリカへの移民が西部アイルランドより容易であったことが考えられる。図2の人口ピラミッドでみれば、50歳代と60歳代で少ない人口は1845年の大飢饉による影響を強く示すものといえる。そして1901～1911年における30～50歳代の人口減少は流出の激しさを示している。とくに男女別で見れば、30～50歳における男性の減少の高さが顕著であった。

Figure 2. Pyramid of Population of Co.Meath



Source: Census Returns, 1901 and 1911, Co Meath

表5によれば、ミーズ州における1901～1911年の人口減少は6.4%であるが、救貧区単位で見ればKellsにおける15.2%の減少が一番高く、以下Ardee, Drogheda, Edenderry, Navanが6%でミーズ州全体の平均と同じである。他方、Dunshauglinは唯一増加した救貧区であり、前述したように富裕な地域で、農業労働者やShepherdの必要性が高く、増加する要因もあったものとみられる。また貧困地域のOldcastlehaはほとんど変化がなかった。ところでKellsの激減は町部的要素を含み、おそらく労働者層の容易な流動性の高さによるものと指摘できそうである。

Table 5.
Population and Number of Households by Poor Law Union in Co.Meath

	1901				1911				Population increase & decrease
	Population		Households		Population		Households		
	Number	%	Number	%	Number	%	Number	%	
1.Ardee	3,024	4.5	688	4.4	2,840	4.5	689	4.7	▲ 184
2.Drogheda	6,595	9.7	1,524	9.8	6,139	9.7	1,484	10.0	▲ 456
3.Dunshaughlin	8,147	12.0	1,857	12.0	8,329	13.1	1,893	12.8	182
4.Edenderry	2,069	3.0	475	3.1	1,935	3.0	476	3.2	▲ 134
5.Kells	16,236	23.9	3,644	23.5	13,762	21.7	3,167	21.4	▲ 2474
6.Navan	13,710	20.2	3,056	19.7	12,881	20.3	2,877	19.5	▲ 827
7.Oldcastle	4,723	7.0	1,071	6.9	4,686	7.4	1,076	7.3	▲ 37
8.Trim	13,335	19.7	3,159	20.4	12,907	20.3	3,118	21.1	▲ 428
N	67,839	100.0	15,474	100.0	63,479	100.0	14,780	100.0	▲ 4360

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

4. 世帯主の属性

Table 6.
Age of Household Heads in Co.Meath

	1901			1911		
	Male	Female	Total	Male	Female	Total
～19	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.2
20～29	6.3	3.5	5.6	5.4	2.4	4.7
30～39	16.1	8.7	14.3	17.7	7.0	15.2
40～49	21.4	14.7	19.8	21.9	12.3	19.6
50～59	23.4	24.2	23.6	19.8	16.8	19.1
60～69	20.9	30.8	23.4	17.7	26.0	19.6
70～79	9.2	13.3	10.2	14.7	30.5	18.4
80～89	2.2	4.3	2.7	2.5	4.5	2.9
90～	0.2	0.4	0.2	0.2	0.5	0.3
N	11670	3788	15462	11291	3467	14758
Mean	50.9	56.1	52.2	52.4	60.9	54.4

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

まず表6により世帯主の年齢構造をみれば、世帯主の平均が1901年の52.2歳から54.4歳に2.2歳上昇している。その内訳をみれば1901では、50～59歳が中核で、以下60～69歳、40～49歳という順序であった。しかし1911年には60～69歳と40～49歳で、30～39歳から70～79歳までの広範囲な拡大が特徴といえる。

そして年齢分布を農民、農業労働者・一般労働者、その他に区分した表7をみれば、1901年で農民の場合60～69歳を中核として40～60歳まで拡大分布を示すが、労働者の場合、50～59歳を中核に30歳～49歳、60～69歳へ二方向に拡大するという相違した分布を示す。また1911年において農民で60～69歳がピークであるものの、40～59歳と70～79歳に世帯主年齢の上昇が顕著であった。反対に労働者では、40～49歳がピークで30～39歳の拡大、50～69歳の減少がみられ、そこに農民の場合とのコントラストが明白になる。

つまり、世帯主が20～29歳で、農民が2.8%と2.5%、労働者が6.6%と6.4%、30～39歳で農民が10.3%と9.6%であることは極めて低いといえよう。それはアイルランドの一般的特徴であるとみられるが、そこには、農民世帯主の年齢上昇化、労働者の下降化が顕著にみられ、それが後述するように農民の家長による家長権の長期化、後継者の未婚化、晩婚化、労働者の場合、家族状況の整備により結婚が可能で、それが世帯主の年齢下降と対応するものと考えられる。

ちなみに世帯主の婚姻率をみておくとミーズ州で1901年と1911年とも52.4であるが、それらはクレア州の63.1と62.1より低い。また生涯未婚率を算出すれば、クレア州の場合、世帯主では9.3と14.3、ミーズ州が全体で28.5と34.0、世帯主で23.1と24.4であり、それはミーズ州の世帯主の婚姻率が低いことを示す。つまり、それはミーズ州の生涯未婚率がクレア州（全体で14.3と23.5、世帯主で9.3と14.3）より極めて高いことを示すものといえる。しかもこのようなミーズ州の生涯未婚化が世帯形成に大きなインパクトを与えるものと思われる。また、それが後述する世帯分類における兄弟同居の世

帯形態や未婚の1人世帯と結びつくことになる。

Table 7.
Age of Householdhead by Occupation in Co.Meath (%)

	1901				1911			
	Farmer	Labourer	Other	Total	Farmer	Labourer	Other	Total
10～19	0.1	0.3	0.4	0.2	0.0	0.2	0.3	0.2
20～29	2.8	6.6	8.5	5.3	2.5	6.4	7.2	4.8
30～39	10.3	16.8	17.5	13.9	9.6	20.3	21.0	15.6
40～49	19.3	20.5	21.6	20.2	19.2	22.3	21.2	20.7
50～59	24.5	23.9	22.9	24.0	22.0	16.7	20.6	19.8
60～69	25.9	22.1	20.2	23.5	23.7	16.2	16.7	19.6
70～79	13.1	8.0	7.2	10.2	18.7	16.3	11.1	16.4
80～89	3.7	1.5	1.6	2.6	3.8	1.7	1.8	2.6
90～	0.3	0.2	0.1	0.2	0.4	0.1	0.1	0.2
N	5,531	3,617	2,684	11,832	4,774	3,984	1,902	10,660

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

つぎに表8は世帯主職業を414種類の職業分類のうち0.3%以上である職種を抽出したものであるが、そこに32種類の職業が含まれる。そのなかで一番多い職業は、圧倒的に農民であり、その数値は1901年の46.5%、1911年の44.4%であるが、以下農業労働者の18.3%と20.6%、一般労働者の8.4%と12.9%、Shepherdの3.7%と3.6%という順序を示す。しかしそれらの数値をクレア州における農民の56.8%と比較すれば、それは農民の割合の低さを示していることが明らかになる。それ以外に1%を超える職業は大工、ホテル・パブ経営者のみであった。ミーズ州の職業分布に関して、第1に、ミーズ州で農業労働者と牧羊者の多さは、牧畜による大規模農業経営であることを明確に示す。第2に、一般労働者の多さは、ミーズ州における立地、つまりNavan, Trim, Kellsという地方町および隣接するDublinにおける労働市場の存在を示唆するものといえる。

それでは、以上のような農業、人口学的特徴をもつミーズ州の世帯構造をつぎに検討しよう。

Table 8.
Occupation of Household Heads in Co.Meath Code

Code	Occupation	1901	1911
5	Police	0.5	0.1
33	Teacher	0.1	0.6
55	Domestic Gardener	0.3	0.5
56	Domestic Indoor Servant	3.8	1.1
60	Caretaker	0.4	0.4
62	Charwomen	0.5	0.2
63	Washing and Bathing Service	0.3	0.1
81	Other Railway Officials and Servant	0.4	0.5
84	Coachman	0.5	0.5
100	Farmer	46.5	44.4
103	Agricultural Labourer	18.3	20.6
104	Shepherd	3.7	3.6
112	Gardener(not domestic)	0.6	0.5
114	Groom,Horse Keeper	0.6	0.8
116	Cattle Sheep,Pig-Dealer,Salesman	0.5	0.5
118	Gamekeeper	0.3	0.2
168	Carpenter, Joiner	1.5	1.7
170	Mason	0.3	0.3
197	Saddler,Harness,Whip Maker	0.2	0.3
214	Innkeeper,Hotel Keeper,Publican	0.9	1.0
225	Bucher,Meat Salesman	0.3	0.2
231	Baker	0.4	0.3
236	Grocer	0.4	0.4
275	Draper	0.2	0.3
282	Tailor	0.7	0.5
283	Milliner,Dressmaker,Staymaker	0.5	0.3
285	Shirt Maker,Seamstress	0.2	0.3
290	Shoe,Boot-Maker,Dealer	0.9	0.7
377	Blacksmith	0.6	0.8
399	General Shopkeeper,Dealer	0.6	0.4
404	General Labourer	8.4	12.9
	N	11,900	10,747

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

5. 世帯規模

表9で世帯規模をみれば、1901年で平均世帯規模が4.4人であったのが、1911年で4.3人に少し減少しているものの、それはほぼ同じ数値とみなしてよい。その内訳をみれば両年とも3人がピークで、以下1901年と1911年で2人、4人、5人という順序をしめす。これをクレア州と比較すれば平均規模の少なさ(5.2人)とピークの低下(クレア州で4人)がミーズ州の特徴であるといえる。このような世帯規模の低下は前述したように、婚姻率の低さにもよるものと思われるが、子供数および非親族である、サーヴァント、同居人、寄宿人、訪問者と関連性もあると思われるので、それをつぎに検討しておこう。

Table 9.
Size of Households in Co.Meath

	1901	1911
1	10.3	10.8
2	16.6	17.7
3	16.7	16.3
4	14.7	14.9
5	12.3	12.5
6	9.9	9.3
7	7.0	6.9
8	5.0	4.6
9	3.5	3.0
10	1.9	1.9
11-	2.1	2.0
Total	100.0	100.0
N	14863	14766
Mean	4.39	4.26

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

表10で子供数をみれば、平均子供数は1901年で3.2人、1911年で3.1人であり、そこに大きな相違はない。しかし、クレア州(3.6人、3.5人)と比較すれば、0.5人少ないことがわかる。その内訳をみておくと、一番多い子供数が1人で両年とも24%であり、それ以外の子供数とその比率は反比例している。1911年で4人までが78%を占めており、5人以上では10%以下であることが読み取れる。つまり子供数の少なさが世帯の小規模化と強く相関している。それらの子供数の少なさは生涯未婚化や晩婚化と強く因果関係をもつといえよう。

つまり、1901年の婚姻率はアイルランド全体で5.1、出生率が22.7、死亡率が16.6であるが、クレア州では3.5、20.6、14.6、ミーズ州で4.2、19.1、17.2であり、両州ともに婚姻率でアイルランド全体より低く3.5と4.2である。したがって、そのような人口学的変数も子供数の規模やさらに世帯規模に大きく関連するものと思われる。

Table 10.
Number of Children in Co.Meath

	1901	1911
1	23.6	24.4
2	21.8	21.5
3	17.5	18.8
4	13.8	13.2
5	9.3	9.3
6	6.6	5.7
7	3.9	3.8
8	2.1	2.0
9	0.9	0.8
10-	0.4	0.6
N	9,762	9,041
Mean	3.2	3.1

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

Table 11.
Number of Children with Age in Co.Meath

	1901		1911	
	Male	Female	Male	Female
0~4	15.9	18.0	16.3	19.9
5~9	16.8	19.4	17.3	20.6
10~14	17.0	19.5	15.8	19.0
15~19	15.0	15.9	13.5	13.8
20~24	13.7	12.4	11.6	9.5
25~29	9.4	8.0	9.0	7.4
30~34	6.2	3.5	7.0	4.4
35~39	3.2	1.6	4.7	2.8
40~44	1.6	0.8	2.7	1.3
45~49	0.6	0.4	1.4	0.8
50~54	0.3	0.1	0.6	0.4
55~59	0.2	0.2	0.2	0.1
N	16267	13559	15738	12456

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

つぎに子供の年齢コーホートを表10でみれば、0~9歳までは1911年の子供数が多いが、それ以外の年齢層では1901年の方が多い傾向である。子供が減少する年齢層は15~19歳で開始され、それ以降も減少が継続するが、30~34歳で急減しており、それは意外に遅いことも明らかになる。つまりそれは15~19歳で労働者として就労するために離家することを意味している。男女別では25~29歳までほぼ同じ割合を示すが、それ以降30歳以上で男子が多くなり、30歳以上の年齢層で1911年は1901年より増加していることがわかる。これは世帯主としての家長が家長権を長く維持することに強く関連する

ものといえる。

またそれは未婚率の高さにも顕現している。(表 12 参照) すなわち、1911 年では 30～34 歳層が男性で 6.7%, 35～39 歳で 4.3% を占めている。この数値は、クレア州と類似したものでアイルランド全体に 1881 年以降浸透した生涯未婚化、晩婚化という人口学的変数と家長による後継者の継承待機を明確に示すものといえよう。

Table 12.
Percentage of Unmarried Children in Co.Meath

	1901		1911	
	Male	Female	Male	Female
0～4	16.1	18.4	16.6	20.3
5～9	17.1	19.8	17.6	21.1
10～14	17.3	19.9	16.1	19.4
15～19	15.2	16.2	13.7	14.1
20～24	13.9	12.4	11.7	9.5
25～29	9.3	7.5	9.0	7.1
30～34	5.9	3.1	6.7	3.9
35～39	3.0	1.4	4.3	2.5
40～44	1.3	0.7	2.3	1.1
45～49	0.8	0.6	2.0	1.1
N	16,030	13,303	15,461	12,204

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

6. 世帯類型

Table 13.
Composition of Households in Co.Meath (%)

	1901	1911
1. Solitaries	3.2	10.9
2. No family	23.8	17.6
3.Simple family households	59.1	57.6
4.Extended family households	12.5	12.3
5. Multiple family households	1.3	1.5
N(households)	15453	14733

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

ハメル＝ラスレットによる世帯分類にもとづいて作成した表13をみれば、ミーズ州は、両年度とも単純家族世帯が58～59%を占め、以下非家族世帯の23.8%と17.6%、拡大家族世帯の12.5%と12.3%、1人世帯の3.2%と10.9%という順序を示す。すなわち1901年の非家族世帯と1911年の1人世帯がきわめて多く分布し、反対に単純家族世帯、拡大家族世帯、多核家族世帯が少ないという特徴はクレア州との比較で明確になる。

そこで表14の世帯分類の内訳にたちいってみれば、1人世帯は未婚者が寡婦・夫より2倍の数値であり、しかもクレア州の2倍である。また非家族世帯は兄弟姉妹の同居がかなり多く、それは9%を占め、親族の同居も5%程度みられるが、それらはクレア州の2倍である。単純家族世帯はクレア州とほぼ同じ分布を示す。しかし拡大家族世帯と多核家族世帯は、すべてのクラスでクレア州より少ないという特徴をもつ。以上から、ミーズ州の世帯は世帯形成がされるものの、家族形成化が弱く、それは家族崩壊的性格を強く内包しているものと判断されよう。

Table 14.
Composition of Households in Co.Meath (1901, 1911, %)

Categories	Class	1901	1911
1.Solitaries	1a Widow	3.2	3.1
	1b Single	7.1	7.8
2.No family	2a Co-residence siblings	8.9	9.0
	2b Co-residence kins	4.5	4.7
	2c Persons not related	3.6	4.0
3.Simple family households	3a Married couples	6.8	7.6
	3b Married couples with children	34.1	33.7
	3c Widowers with children	5.2	4.7
	3d Widows with children	12.7	11.7
4.Extended family households	4a Extended upwards	3.3	3.3
	4b Extended downwards	5.1	5.0
	4c Extended laterally	3.6	3.3
	4d Combinations of 4a-4c	0.6	0.6
5.Multiple family households	5a Secondary units upwards	0.3	0.3
	5b Secondary units downwards	1.0	1.1
	5c Secondary units lateral	0.0	0.0
	5d <i>Frdreches</i>	0.0	0.0
	5e Other multiple family households	0.1	0.1
N		14853	14733

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

このような非家族世帯と1人世帯の形成は先述した未婚化（生涯未婚も含む）、晩婚化と大きく関連するものと思われる。さらにそれは、農民の家長が、土地保有権を長期に維持したいという状況と、継承者が未婚で土地継承を待つという状況により発現したものと推察される。また1880年頃からアイルランド全体で未婚化や生涯未婚化が浸透してきたこともそれを促進させた大きな要因と考えられる。

Table 15.
Composition of Household with Occupation in Co Meath (%)

	1901			1911		
	Farmer	Labourer	Other	Farmer	Labourer	Other
Solitalies	1.6	2.8	4.7	8.2	11.7	11.1
No family	25.9	19.4	24.2	23.8	11.8	16.5
Simple family households	56.7	65.0	58.3	53.3	63.3	59.7
Extended family households	14.1	11.6	12.0	13.1	11.8	11.7
Multiple family households	1.7	1.2	0.9	1.6	1.4	0.9
N(households)	5,522	3,614	2,683	4,763	3,974	1,896

Labourer=Agricultural and General labourer
Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

また表15の農民、労働者、その他に3区分した世帯分類によれば、1901年、1911年ともに農民世帯で非家族世帯が4分の1占めていること、1901年では労働者、その他の世帯では非家族世帯が多いが、1911年でも同様に継続した分布を示す。他方で労働者世帯とその他の世帯では非家族世帯が減少し、1人世帯が増加しているという特徴がみられる。そして、クレア州と比較すれば、農民で大家族世帯と多核家族世帯が15%であり、ミーズ州におけるそれらの数値がかなり少ないものとみてよい。

したがって西部アイルランドのクレア州と東部アイルランドのミーズ州の比較から、ミーズ州の世帯は、農民で非家族世帯と1人世帯が1901年で27.5%、1911年で32%に増加し、しかも非家族世帯では兄弟同居世帯が両年度とも9%をしめるという特徴を強くもつ。また、労働者、その他の世帯でも1911年に1人世帯が増加している。つまり、アイルランド全体で浸透してきた独身化や生涯未婚化という婚姻変数がミーズ州では大きなインパクトを世帯形成に与えたものと判断された。

7. 親族数

Table 16.
Resident Relatives and Others by Relation to Household head in Co.Meath

	1901	1911
Parents	2.7	2.3
Siblings	21.6	20.9
Siblings in law	1.8	1.8
Children in law	1.2	2.5
Nephews and Nieces	9.1	8.4
Grandchildren	8.9	9.8
Other relatives	1.6	3.3
Total kin	46.9	49.0
Servants	27.1	23.3
Lodgers	1.8	1.4
Boarders	5.2	6.5
Visitors	3.2	3.1

Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

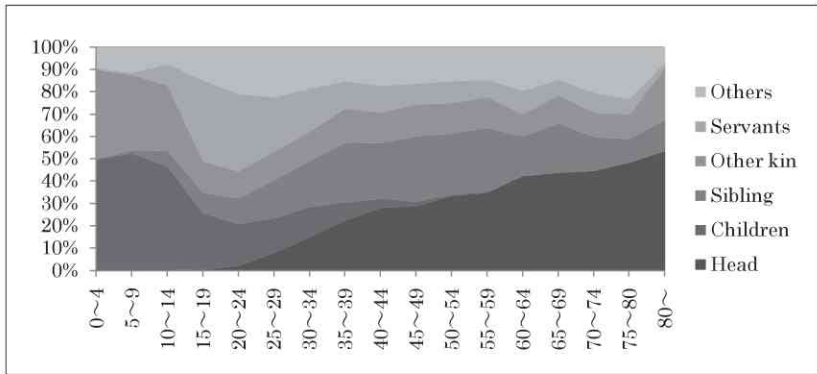
表 13 は、R.Wall が 1983 年に提起した算出方法であり、同居親族集団の世帯主に対する関係構成と親族関係の規模を 100 世帯当たりで示した値である。この方法はハメル＝ラスレットが夫婦世帯単位とした世帯分類による問題点を補う 1 つの方法であるといえる。

それによると、親族総数が 1901 年の 46.9 人と 1911 年の 49.0 人で、それはクレア州の数値 (51.3 人と 53.9 人) より少ないことが分かる。そして、その内訳をみれば兄弟姉妹が 21～22 人で、全体の半数近くを占めており、つぎに下向世代の甥・姪と孫が 9 人程度、上向世代である両親が 2 人という特徴がみられる。それは典型的な直系家族が発現しているクレア州と大きく相違した分布を示す。すなわち、クレア州では両親が 9 人前後、兄弟が 14～17 人、

孫が12人前後、甥・姪が7人前後という分布がみられるが、それらに対してミーズ州では兄弟姉妹の割合の多さが顕著に認められる。つまりそれは未婚で世帯形成をする非家族世帯の多さを示す結果に顕現しているものといえる。

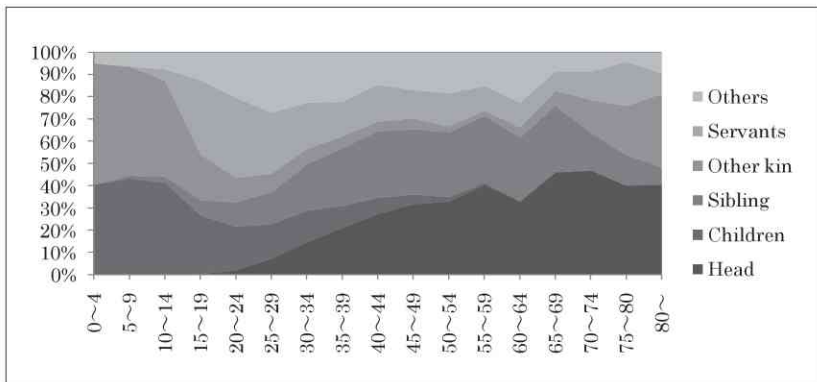
8. ライフコース

Figure 3. Males by Age and Household Relationship in Co.Meath (1901)



Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

Figure 4. Males by Age and Household Relationship in Co.Meath (1911)



Source: Census Returns of Ireland, 1901 and 1911

先述したように家長は家督や土地相続権をできる限り堅持し、土地に家名を残したいという意識が強く、早い段階で後継者にそれらを継承させようとはしない。その結果、後継者は家族労働力として未婚の状態に置かれた。そこで世帯主のライフコースからミーズ州の世帯主の世帯形成過程の特徴をみておこう。

すなわちミーズ州において、1901年では世帯主は、20歳代後半から80歳までなだらかな山を形成するのに対して、子供は50歳まで減少しながらも継続した分布が明確に認められる。兄弟は30歳代から拡大し始め、70歳代で減少しながらも継続した分布を示す。他の親族は、10歳代中頃まで多いものの、その後かなり減少しながら持続するという傾向がある。そのような1901年と1911年とを比較すれば、ほぼおなじようなライフコースが展開されているが、1911年における兄弟姉妹が、50～70歳まで1901年より多く分布していることが相違点であるといえる。そのような世帯主のライフコースは兄弟の同居の長期化と結びつき、このような世帯主のライフコースから世帯分類における未婚の非家族世帯の多さが理解される。

サーヴァントに関して、1901年と1911年とほとんど同じ動きがみられるものの、1911年では30歳代で少し減少しながら、それ以降の1901年の減少と相違して40歳以降も少し増加傾向が維持されている。

以上の世帯主のライフコースから、継承者が土地相続をしたとしてもすぐに結婚するのではなく、残留している兄弟との同居が継続する可能性が高いことを意味し、大規模の牧畜農ではサーヴァントとともに同居する兄弟が貴重な労働力資源であるとみられる。つまりそれは世帯形成に婚姻変数が大きく作用しているものと理解される。

9. ミーズ州におけるケース・スタディによる世帯構造と相続

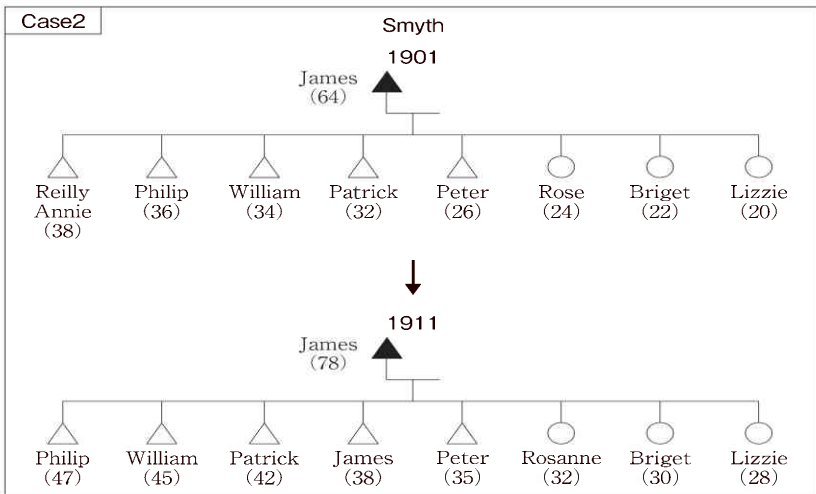
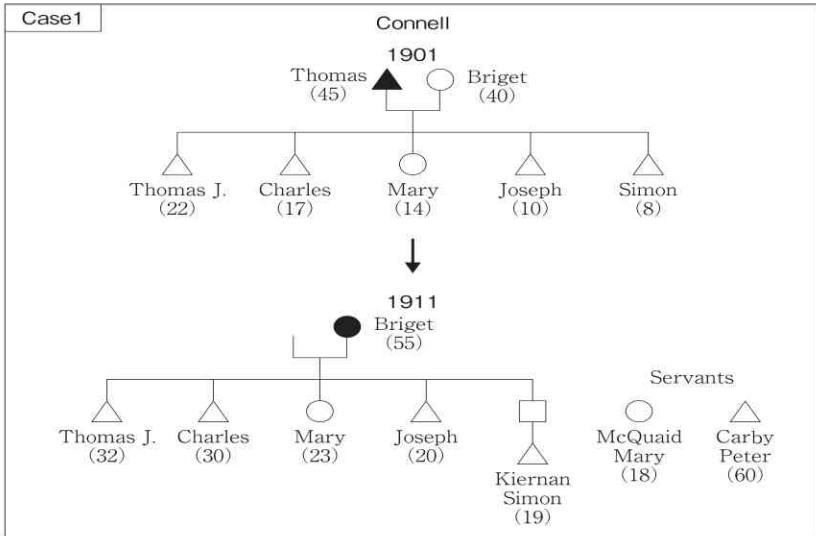
以上の分析から、まず同じタウンランドでの継続的居住率が低く、特に労働者の流動性が高いという人口学的変数、および特に1881年以降、アイルランド全体に浸透してきた未婚化、晩婚化、生涯未婚化という人口学的変数が世帯形成に大きなインパクトを与え、家族崩壊とみられるような性格も世帯構造に内包されていたことが明らかになった。その結果ミーズ州でクレア州より拡大家族世帯と多核家族世帯の割合が少なく、農民では非家族世帯と未婚の1人世帯の割合が1911年で32%を占め、特に非家族世帯では兄弟同居世帯の割合の高さが特徴として顕現していた。そこで以前松尾が詳細なモノグラフで取り上げたアッパー・ナヴァン郡ベクティブ選挙区ベクティブ・タウンランドを取り上げ、世帯構造の特徴をケース・スタディにより明らかにしたい。

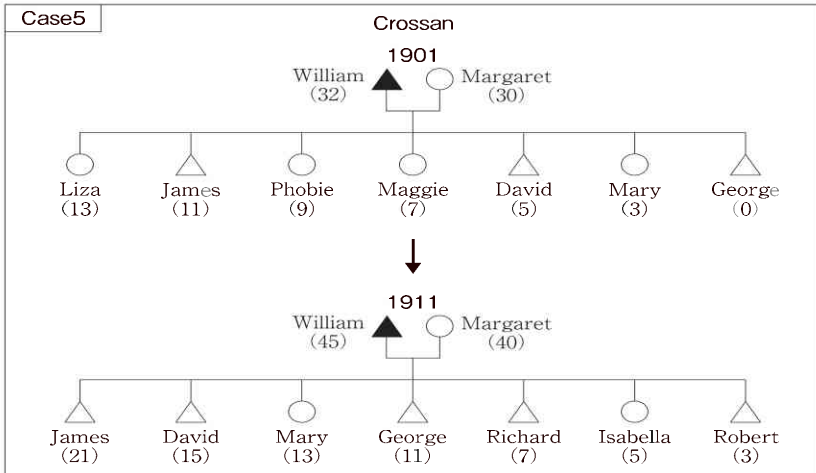
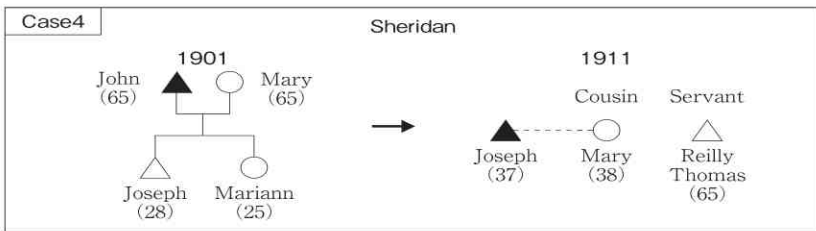
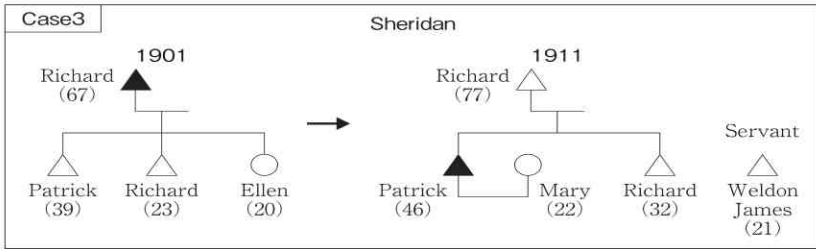
ベクティブ・タウンランドは1901年に19世帯あったが、1911年には11世帯に減少し、継続世帯が7世帯、消滅世帯が12世帯、新しく入村してきた世帯が4世帯であった。

消滅世帯はほとんどサーヴァント、家畜管理、家畜見張りという農業労働者であった。また入村者も3人が農業労働者、1人が一般労働者であり、これらの消滅世帯、入村世帯ともに土地なし世帯であった。したがって、これらの世帯は流動性が高い世帯で、継続世帯はほとんど農家であった。以下ベクティブのケース・スタディをとおして世帯動態を詳細に見てみよう³⁾。

3) ここでの土地保有面積に関しては松尾太郎資料による。

Figure 5. Case Study of Household in Bective, Co.Meath





Note: △=Male, ○=Female, ▲=Household head, ()=Age

[ケース 1] Connell家は世帯主のThomas (45歳)と妻Bridget (40歳)と子供4人、甥1人による7人の拡大家族世帯であり、2つの区画に34エーカーと36エーカーの土地を保有する70エーカーの農民であった。Thomasは1854年の地方税評価簿に記載されているThomas Carolanから何らかの方法で70エーカーを入手していた。1911年にはThomasはすでに死亡し、55歳で配偶者のBridgetが相続し、いまだ32歳で未婚のThomasには相続させていない。この世帯では雇用されているサーヴァントが2人おり、息子の3人(Thomas, Charles, Joseph)の労働力によって十分経営できるものといえる。世帯構成はサーヴァント2人を含む8人の拡大家族世帯でこの10年間に変化が認められない。

[ケース 2] Smyth家は世帯主James (64歳)がすでに配偶者をなくし、子供8人(息子4人、娘4人)の大核家族を構成している。1854年に保有していた父親のPhilipからJamesは31歳で1878年に55エーカーを相続している。それはおそらく父親Philipの死後相続と思われる。そして1911年にはJames (78歳)は家長を継続し、息子のPhilip (47歳)にいまだ相続させず、彼は未婚のままである。この10年間にAnnieという娘が離家しているのみで、彼女は1901年にすでに38歳であった。またこの期間に息子のJames (38歳)が帰家している。1911年には9人の単純家族世帯であった。このケースでは1911年段階で息子に相続させずに、Jamesは土地保有権を保持している様子が明確に認められるとともに、子供たちも結婚せずに家に残留していることが明らかである。職業欄に4人の息子はすべて農民の息子と記載されており、サーヴァントなどの農業労働者は存在しないが、彼らの労働力で十分経営可能な面積である。なお、おそらく息子のPhilipが1911年と1937年の間に父親の死後相続しているものとみられる。

[ケース 3] Sheridan家は世帯主のRichard (67歳)が配偶者をなくして、息子

2人と娘の4人世帯であり、Richardは1878年に34歳で土地40エーカーを1854年段階で保有していたThomas Mikeeverから何らかの方法で入手し、息子のPatrickが1899年に生前相続をしている。1901年と1911年の10年間に娘のEllenが離家するとともに、Patrickが22歳のMaryと結婚し、弟のRichard（32歳）が家に残留し、農業サーヴァント1人を加えて5人の多核家族世帯を形成している。これは父親の老齢による生前相続と推察されるが、Patrickが相続後、縁組婚により結婚し、直系家族を形成したケースと思われる。

[ケース4] 同じSheridan家であるので、おそらくRichardの弟であると思われるJohn（65歳）夫婦と息子Josephと娘Marianの4人世帯である。父親のJohnが1854年の地方税評価簿に24エーカーの保有がみられる。それを息子のJohnが1878年に32歳でそれを相続したと思われるが、おそらくそれ以前にMaryと結婚していた。1901年以降Johnの死亡後、一時Maryが相続し、Maryの死後、息子のJosephが相続し、1911年には未婚のJosephとイトコのMary、サーヴァントと非家族世帯を形成していた。

[ケース5] Crossan家は農家でなく、Williams（32歳）は羊飼いの雇用労働者で、21歳で結婚し7人の子供（4人の息子と3人の娘）からなる単純家族世帯を形成していた。そして1901年と1911年のあいだに3人の娘が離家し、おそらく彼女らは家内サーヴァントに雇用されたと思われる。そして1901年以降も子供を出産し、7人（5人の息子と2人の娘）の子供と9人の世帯を形成していた。1911年の彼の職業は、農場管理であり、その時点で24エーカーの土地を入手していた。それはおそらく農地改革後に購入したものと思われる。このケースは農業労働者の場合家族状況要因が準備できれば、早婚が可能であることを示している。

以上のケースから世帯主は土地にたいする統制権を長く維持したいという意識が強く、息子が40歳代になっても相続させないでいることが理解される。

また、世帯主の死亡後、その配偶者が若い場合一時的ではあるが、意外に長く統制権利を保持し続ける傾向があることも指摘できる。さらに早く、継承者が土地相続をしたとしても、結婚せずに兄弟と同居する場合があることも明らかにされた。そのような農民に対して農業労働者は早い結婚が可能であり、同じタウンランドに継続して留まるか、あるいは他出するか流動性が高いことも理解することができた。(Figure 5 参照)

10. 結びにかえて

以上においてまず東部アイルランドにおける世帯構造を編成させる仮説を提起した。つまり独立変数として、農民、労働者、従属変数として世帯構造、媒介変数として婚姻、相続、土地保有、人口学的変数とみなした。そして、ミーズ州で、100 エーカー以上という大農民では、家長は土地に対する統制権の長期に保持したいという意識を強くもち、継承者に相続を待機させ、継承者は未婚の状態に置かれ、晩婚化、未婚化を強いられた。しかし、農業労働者、一般労働者は、国内移動、国際移動、大西洋横断移動が容易であり、その結果労働者の流動性も高いといえよう。そして婚姻の条件が準備できれば結婚が可能であり、早婚、晩婚あるいは生涯独身を選択することができた。

このような変数により世帯形態は単純家族世帯が多いものの、多核家族世帯、拡大家族世帯がクレア州より低く、非家族世帯、1人世帯が多くなる。しかしミーズ州の世帯構造にも直系家族規範が存在するとみられ、家族状況の支持があれば直系家族が形成される可能性を持つという仮説を提起した。

その結果、ミーズ州での農業は、1 エーカー未満の農民の多さに影響され30 エーカー以下層の小規模農民が70%を占めるが、100 エーカー層の大規模農民が12%をしめ、それはアイルランド全体の6%の2倍の規模を持つ。しかも大規模農民は1880年代以降特に穀作農業よりも牧畜業に特化し、それは西部から購入した2歳牛を2.5~3歳まで肥育し、それをダブリン市場での売却やイギリスへ生牛で輸出するという商業的牧畜業であった。それゆえ、農

業労働者や牛飼、羊飼いの労働者を必要とし、世帯に残留する息子も貴重な労働力資源であった。

そのような東部アイルランドの牧畜業が可能であったのは西部アイルランドにおける子牛から2歳牛までの肥育との分業が前提であった。たとえばDunshanghlin選挙区におけるDerrockstownの農民であるEdward Delanyは、1854年のグリフィスの地方税評価簿によれば251 エーカーを保有していた大農民であった。彼は、1851～99年の48年間にわたる牛、羊などの購入、販売に関する『農場経営簿』を詳細に記録している。それをみれば、その期間における購入頭数、購入値段、購入先、販売頭数、販売額、販売先、純利益などが詳細に記録されており、それにより牧畜農業経営の実態を把握することができる [Jim.Gilligan, 1998, 27, 64]。

そのような農民に対して、農業労働者、一般労働者はケース・スタディでみたように国内移動、国際移動、大西洋移動の流動性を内包させた可能性が農民より高かったと思われる。

農民の場合、家長は土地保有を長期に保持し、土地に家名を残したいという意識が強い。

それに対して後継者は家長の死亡や身体的衰えにいたるまで、相続を待機することを強いられていた。それゆえ土地の相続後結婚するか、未婚でいるかを選択する必要があった。ミーズ州でも持参金システム、縁組婚制度の残存が確認されており、大農民の場合には仲人を介して同階層の家との縁組が行われたものと推察される。しかし中小規模農民の場合、継承者はすでになりの年齢であり、婚姻相手を見つけることが容易でない可能性もあった。そして1880年代頃よりアイルランド全体で浸透してきた生涯未婚化、晩婚化により、世帯を形成しない後継者もいたようである。ミーズ州の場合には、生涯未婚者が1901年の28.5から1911年の34まで上昇し、世帯主では23～24という数値が認められた。その結果、世帯分類において非家族世帯、1人世帯の多さが顕現してくるのである。

他方労働者の場合には、世帯形成の準備ができれば、早い結婚による世帯形成の可能性をもつことができたのであるが、それが不可能である場合は、晩婚化、生涯未婚化の選択をしなければならなかった。労働者の非家族世帯は農民世帯より少ないが、未婚で孤独な1人世帯が多いという特徴を認めることができる。

これまで検討してきたクレア州のように西部アイルランドでは直系家族規範が認められ、それを支持する家族状況が確認することができたのであるが、ミーズ州のような東部アイルランドでは、直系家族規範が存在するとしても、それを支持する状況的要因に強く規定される傾向があったといえる。したがって、ミーズ州全体で多核家族世帯と拡大家族世帯が14%でクレア州より少ない数値で農民の場合には15~16%で、少し多い結果を示す。つまり家族規範、相続、結婚という媒介変数が世帯形成に強くインパクトを与えているものと判断できた。そして世帯形成が行われても、そこに家族が形成されていないという家族崩壊的性格も内包されていたといえよう。

参考文献

Unpublished documents

Census Returns of Ireland, Co.Meath, 1901, National Archives of Dublin,
Census Returns of Ireland, Co.Meath, 1911, National Archives of Dublin,

Published books and papers

Arensberg, Conard and Solon T.Kimball, 2001 (1940), *Family and Community in Ireland*,
Clare: Clasp Press.

Breen, Richard, 1980, *Up the Airy Mountain and Down the Rushy Glen*, Unpublished
Ph.D Dissertation, University of Cambridge.

Clarkson, L.A.1981, Marriage and Fertility in Nineteenth Century Ireland, R.B.Outhwaite
(ed), *Marriage and Society: Studies in the Social History of Marriage*, London: Europa
Department of Agriculture and Technical Instruction for Ireland, 1902, *Agricultural
Statistics of Ireland, 1901*, Dublin: His Majesty's Stationary Office.

- 1982, Fitzpatrick, D., *Class, Family and Rural Unrest in the Nineteenth-century Ireland*, P.J.Drudy (ed.) *Ireland: Land, Politics and People*, Cambridge: Cambridge University Press,
- ハメル・ユージン, ラスレット・ピーター 2003, 「世帯構造とは何か」, 速水融編『歴史人口学と家族史』, 東京: 藤原書店, 308-348.
- Gilligan, Jim, 1998, *Graziers and Grasslands. Portrait of a Rural Meath Community*, Dublin: Irish Academic Press,
- 清水由文, 2011, 20世紀初頭におけるアイルランド・クレア州の世帯構造, 『桃山学院大学社会学論集』, 44-2, 5-37.
- 松尾太郎, 近代アイルランド先進地農村における土地保有 - ミーズ州の二教区 1821~1901年 -, 『法政大学経済志林』, 62-3/4, 1995, 35-114.
- 松尾太郎, 1998, 『アイルランド農村の変容』, 東京: 論創社.
- Rhodes, Rita, 1992, *Women and Family in Post-famine Ireland*. New York and London: Garland Publishing Inc.
- Steidl, Annemarie and E.Stockhammer, 2007, *Coming and Leaving Internal Mobility in Late Imperial Austria*, Department of Economics Working Paper No.107, University of Vienna.
- Steidl, Annemarie, Introduction, 2009, Steidl, Annemarie, Josef Ehmer, Stan Nadel and Hermann Zeitlhofer (eds), *European Mobility*, Gottingen: Vandenhoeck and Ruprecht and C.
- 7-16.
- Vaughan, W.E. and A.J Fitzpatrick, 1978, *Irish Historical Statistics, Population 1821-1971*, Dublin: Royal Irish Academy.
- 1981, 米村昭二, 「アイルランドの農民家族の婚姻」, 家族史研究委員会編『家族史研究』, 東京: 大月書店, 116-155.
- ウォール・リチャード 1988, (中村伸子訳), 斎藤修編著『家族と人口の歴史社会学 - その人口学および経済的変化』, 東京: リプロポート, 265-292.
- Wilson, Thomas, 2006, *Locating the Anthropology of Ireland*, T.M.Wilson and H.Donnan, *The Anthropology of Ireland*, Oxford: Berg.

〔付記〕本研究を遂行するにあたって、ダブリン大学トリニティ・カレッジLouis M. Cullen名誉教授およびベルゲン大学Arne Solli准教授に深く感謝しておきたい。

Household Structure of Co. Meath in Ireland at the Early 20th Century

Yoshifumi SHIMIZU

The present paper sets out to clarify the characteristics of the Irish family in Co. Meath from the perspective of comparison with Co. Clare that C. Arensberg and T. Kimball had researched at 1930s.

My hypothesis that a simple family households based on the partible inheritance system that was dominant in the early 19th Century, but after the Great Famine this shifted to extended family households or multifamily households based on the integrated matchmaking system with a dowry and the impartible inheritance by Land Law Act (1852). When I compare the household structure of Co. Meath and Co. Clare, I can conclude the norm of stem family is weaker than that of Co. Clare and the household structure of Co. Meath was influenced with the element of the family situation and the proportion of extended family households or multifamily households in Co. Meath that were fewer than that of Co. Clare.

To verify this hypothesis, I used the 1901 and 1911 Census Returns and I have arrived at the following results.

First, I found the mean of size of household was 4.4 members in 1901 and 4.3 in 1911 and this number is smaller than those in Co. Clare (5.2 and 5.0). It seems that was partly the small number of children born due to influenced by the late marriage and the practice of celibacy.

Second I believe the dominant household type of Co. Meath in the early 20th century was the simple family households. However there were only 14% of extended family households and multifamily households, but was also the large number individuals living in no family households (23.8% in 1901 and 17.6% in 1911). This indicates there were many people who did not many.

Third looking at a detailed tabulation of kinship groups in 100 households, the household had a total 47~49 relatives inside households and it is a characteristics of the high percentage of siblings (21 persons). This can be accounted for by the practice of late marriage and celibacy.

Fourth I selected a townland, Bective as a case study and note the movement of the type of family between 1901 and 1911. As the result, I could confirm the family heads not only actually controlled, but tended to delay the appointment of heir and transfer of headship and estate to appointed heirs. This forced sons to wait for the physical decline or demise of their father, resulting in the prevalence of late marriages and celibacies.

I have mostly verified the above hypothesis using some several data, but I can find the norm of stem family in Co. Meath is weaker than Co. Clare.

Keywords : Ireland, Co. Meath, stem family, extended family household,
multiple family household